

ねがいのいえニュース 第64号

社会福祉法人ねがいの杜 広報紙・2022年10月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区宮前町812-2

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail info@negainoie.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



まだまだ先が読めないパンデミックの世界、減少傾向にありながら身近に感染者は続いています。みなさまご無事でお過ごしでしょうか？

ねがいのいえは8月から 社会福祉法人ねがいの杜^{もり}として事業を継承しました。これもみなさまの多大な応援に支えられたおかげです。謹んで感謝申し上げます。なお、「ねがいのいえ」という名称は、グループホームの事業所名、ならびに、生活支援部の名称として残しております。今後も今までと同様、「ねがいのいえ」と呼んでくださってけっこうです。

9月からは、当初の計画よりおよそ1年半遅れでようやく女性棟グループホーム「ほほえみそう」の運営がスタートしました。同時進行で、さいたま市からの助成金をいただいて建設する男性棟「あったかそう」は、予定より8ヶ月遅れで着工しました。工事は順調に進み年内には完成します。困難を抱えるご家族にはお待たちいただき心苦しい限りですが、もうしばらくお待ちいただけるようお願いいたします。

「全か無」ではない選択肢

重度の障害のある子が生まれたその日から、我が子の将来を案ずる家族の不安の日々が始まります。やがて、保育園の壁、小学校の壁など、成長と共に常に新たな壁に直面することを繰り返していきます。ご家族は全てが初めての体験であり、困惑が終わる日は来ないのかという気持ちになることでしょう。

さらに、不測の事態によって家族に危機が訪れた時、重度障害の子どもを預けられるところはあるのか、宿泊はできるのか、不安は尽きません。よしんば見つかったとしても、医療的ケアがある人は断られることがほとんどでした。

ねがいのいえはオープンした時からその全てのニーズに応えてきました。そして同業のみなさまへ、利用者にとっての「かかりつけの事業所」になりましょう、と訴え続けてきました。困った時にいつでも、24時間、年中無休で、1日のお預かりから数日、時には数週間の泊りまで可能、強度行動障害であっても、医療的ケアがあっても、それが0才児であっても、一切断らない安心感を、全ての事業所が提供してあげて欲しい、というのが、ねがいのいえの願いであると訴え続けてきました。

そしてそのように濃密な支援を受けてきた重度障害の児童が大人になった時に、濃密な関係を築いてきたスタッフに支えられてグループホームで暮らすことができる、その道筋がこの国のスタンダードになって欲しいと願っています。そのような社会になった時、初めて、どんなに重度な障害のある子が生まれても、日本は安心して暮らせる社会だと誰もが胸を張れることでしょう。

しかし多くの事業者の意識はまだその領域にたどりついていません。家族もまた、30代、40代のお子さんを介護しながら、できる限り我が子と一緒にいたい、自分が倒れるその日まで自分で見ていたい、とがんばられます。しかし、誰にも預けられた経験のない重度障害の方が、ご家族が倒れたその日から、誰も知る人のいない遠くの施設へ強制的に送られる、これほどの不幸があるのでしょうか？

できる限り一緒に暮らしていたい親子にとって、突然の別れを迎える辛さは想像に難くありません。それなのに、ある日突然、在宅から入所に切り替わることが多いのが現実です。しかしこの、自宅で一緒に暮らす日々と、家族から離れて入所で暮らす日々と、「全か無」しか選択肢がないという思い込みが間違いなのだと思えてなりません。

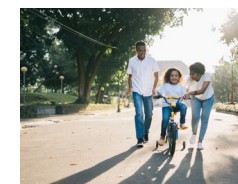
実際にはその中間の選択肢が可能はずです。自宅から近くのホームに入居すれば、まず週に1回か2回の体験入居から開始し、3回、4回、5回と増やし、数年間、週末は帰宅する生活を続けたあと、時間をかけて完全にホームの暮らしに移行していく、そんな全と無の中間の選択肢を実践したらいかがでしょうか？もちろん、今まで通っていた職場や通所は変わらずに通い続けることができます。

ねがいのいえの利用者のみなさまは、幼少から利用を続け慣れ親しんだスタッフに支えられながら、まさに今、そのプロセスを実践しています。まだ一緒に暮らしたいと願いながらも突然の危機が訪れたらどうしようと不安を感じているご家族が、自宅とホームを行き来するスタイルなら安心と、入居を決められています。それは、強度行動障害の方でも、医療的ケアの必要な方でも、誰でも可能なのです。そして私たちのこの考えに共鳴する事業者の方が、同じように実践したいと、宿泊の業務を体験しに来られています。

全ての事業者と全ての利用者に共鳴して欲しいと、繰り返し訴えます。

当たり前の人間として寄り添う

どんなに重度な人もホームで穏やかに暮らすことができると発信するねがいのいえには、強度行動障害の対応に悩む事業者や当事者家族などから、日々相談が寄せられます。内容はどの方も共通し、他害や破壊行為が激しく、自宅でも施設でも過ごすのが困難で頼るところがない、という所なら穏やかに暮らせるのか、という質問です。そのエリアは全国に及び、私たちが直接手助けすることはできないし、本人を見ていないのに無責任な回答はできません。ただ、自分たちが実践している支援について伝えるのみです。



と言っても、電話やメールだけで詳しい内容は伝えられません。ただ、今の状態をどう本人が感じていると思うか、何が本人の悲しみなのか、に想いを馳せてそばに寄り添う、という当たり前のことができていけるなら、おのずと落ち着きを取り戻すでしょうと伝えます。

しかし現実には、重度障害の人たちは何も理解できないと思われ、目の前で悪口を言われ、雑に扱われる、ほとんどの施設や病院でそんな対応が少なからず横行しています。しかも幼少のころからそんな関わりをされてきた方々は、その苦しみの記憶が体の奥深くに刻み込まれています。普通の人の何十倍も癒しを必要としている方たちを、施設や病院スタッフの言動が刃となってさらに追い込む様子を、数えきれないくらい見てきました。

そんな言動を一切なくし、喜びも悲しみも感じる当たり前の人間としてそばにいてくれる支援者がいるだけで行動障害は穏やかになることを、心のケアの実践者は体現しています。

ソマティック心理学

強度行動障害の方が穏やかに落ち着くためには、ストレス要因を可能な限りなくしていかなければなりません。毎日過ごす日中活動はやりがいが持てる作業になっているか、楽しいと感じているか、支援者は気持ちをわかってくれる人たちか。

それだけの基本的要件を満たした上で、心のケアのメソッドによって、100人のうち98人までが穏やかになりましたが、それでもなお改善しない人がいる現実に直面しました。

それはもはや過去の人生で体の奥深くに刻み込まれてしまったトラウマによるものと推察します。私たちの関わりによって現在の苦しさは癒されているけれど、私



たちと出会うずっと前に生じた原因が癒されないまま残っているのです。

ではどうしたらその苦しみを癒すことができるのでしょうか？

そもそもトラウマとは何か？つらい記憶を思い出した時、私たちは体に変調が起きるのを感じます。頭が痛い、お腹が痛い、吐き気がする、便秘になる、下痢になる、体が動かない、起きられない、など。その原因は、神経に損傷が起きているからだわかっています。つまりトラウマとはもはや心の病ではなく、筋ジストロフィーやALSなど神経性の難病と同じく、身体の病気だと位置づけているのです。トラウマを癒すということは神経を修復する作業であり、そのために有効なのがソマティック心理学の手法だと考えられています。

ソマティック心理学、つまり身体心理学と呼ばれるその理論は、体が記憶している苦しみを癒し、不快な記憶を思い起こしても体に何の変調も起こらない状態を目指す、という考え方で

す。変調が起きなければ、その記憶はもはやただの思い出でしかないということです。重度の知的障害の方の中には、自分の顔を叩き続ける自傷が止まらない方がいらっしやるのをご存知でしょう。片時も止まらない自傷行為で自分を傷つけるのを防ぐため、常にスタッフが1人付き添い、その叩く手を止め続けています。根本的にはその行為が消失して欲しいけれど、そんな方法は世界に存在しないと思われてきました。

様々な手法がある中で、今ねがいのいえが最も推奨しているのは、体に触れて緊張をほぐし、

心を癒すタッチセラピーです。そしてそのタッチをどの臓器に施すかで、違った効果を発現することがわかっています。どの効果を意図するかは、その時の本人の表情や雰囲気から伝わってくる情報によってセラピストの直観で判断します。

ある日、自傷しつづける人にタッチをしていたところ、頭蓋骨を緩めて脳を楽にして欲しい、とひらめきました。直観に従い、片手で自傷する手を止ながら、片手を後頭部の頭蓋に当てました。頭蓋骨の振動が最適に調整され、脳が緩み楽だと言っているイメージ、扁桃体が活性化し、オキシトシンの分泌が促進されるイメージ、へと続きます。自分の全身に温かな喜びが広がるのを感じながら、同じ感覚が相手の全身にも広がっていくのを想像しました。やがて発声が消えていき、体の緊張が抜け、落ち着きを取り戻していきました。

それから2週間は声も自傷もなく穏やかに過ごしました。再び元の状態に戻ってきましたが、苦しさが溢れてきたらいつでもまた同様の解放をおこないます。それを何年も積み重ねた先に、やがて体を巣食うトラウマたちがひとひらづつ剥がれていき、すっかり癒された笑顔に出会える日が来るのだと思われま



「グループホームはベストなのか」論争

今、放課後デイ乱立時代が一段落し、新たにグループホームの乱立時代が到来した感があります。重度障害の方たちの想いを丁寧に聴き取る支援を実践してきた先駆者の先輩方からは、その風潮を批判する声が上がっています。

グループホーム新築、入居者募集、と書かれたDMは私たちのところにも大量に届きます。が、そのようなホームは、障害が軽く自立度の高い人を対象としており、強度行動障害や医療的ケアの方は断られ、結局取り残されます。ねがいのいえが目指すのは、重度で支援が困難と言われる方たちも、誰も断られることなく生まれ育った街で暮らしていけるホームであり、それにはひとりひとりの特性に合わせて計画的に準備していかなければなりません。

しかしその目標もまたゴールではありません。障害者はグループホームが一番いいのだなどとは私たちも考えていません。とりあえず、ご家族が倒れた時に、本人が望まない遠くの施設へ旅立つことがないように、出会った人のために整備を進めています。

ですが、本当の理想は、「生まれ育った街」ではなく「どこでも好きな街」で、「支援者に用意された環境」ではなく、「本人が望む環境で暮らせること」に違いありません。言葉の話せない重度な知的障害者であっても一人暮らしをしたいかもしれません。もしかしたら、好きな異性、愛する人と一緒に暮らしたいと思っているかもしれない。そんな想いをひとりひとりキャッチし実現する高い支援力が、私たちに求められているのだと思います。

見知らぬ遠くへ旅立たなくてすむように、まずは住まいを用意。そしてその先の長い人生を、どれだけ希望を叶えて生きることができるのか。私たちは人の人生を左右する責務を負っていることを、十分認識しています。